「いきいきしさ」を保育体験から考える

佐治由美子

倉橋は、子どもの友となる上で大人に最も必要とされるものが、いきいきしさであるという。子どもが最も求めているのが生命だともいう。大人が子どもに与えるべきが、いきいきとしたまなざしや声や動作だけでなく、いきいきとした感じ方、考え方、欲し方のすべてであると、そう綴っている。

私たちは子どもと共にある時、子どもが動き回り少しもじっとしていられないことを、子どもらしい姿として子どものいきいきしさと重ねているところがある。また、保育者についても、子どもと同じように溌溂とよく動き明るい声を発する姿を、いきいきとした保育者像として描きやすいということもある。もちろん、フットワーク軽く動くことができるのは保育者の大事な資質であろうが、このような、私たちの目に見えるところで展開していくいきいきしさは、誰にとってもわかりやすいということなのだろう。

いまここで、私は、倉橋のいう「いきいきしさ」に裏打ちされた感情や思想というものに迫ってみたいと思っている。それは、目に見えてわかりやすい

ものではないだろうが、私なりに体験を通して感じ取ったことを、記憶の中からたぐり寄せるようにして言葉にのせてみたいと思う。

Tの描画に表現されたもの

Tは現在、愛育養護学校（以下、愛育）の高学年男児。私がかかわったのは、もう六年も前の幼稚部入園のころである。Tは、当時ひとところにじっとしていることの少ない、動きの多い子どもであった。

朝登園してくると、カバンを肩に掛けたまま庭にある大きな丸太や植木鉢をひっくり返し、虫を探しては徹底的に足で踏んだり、二階に駆け上がったかと思うと、図書室に置いてあった水槽に手を入れ金魚を一匹ずつ手のひらでつかんだりと、息が詰まるような活動ぶりを見せていた。

生き物に対する彼のかかわりをどのように受け止め返していくかということを考える一方で、周囲の子どもたちとの間で頻発するさまざまなトラブルのために、まさに彼から目が離せないという状況に置かれる日々であった。そんな中で、私が気にかかっていたのは、いつも動き回っては何か事を起こしている彼の表情が心ここにあらずという様子で、一緒にいても意外にも彼の存在感が感じられないということだった。彼は、これをやりたいという願いをもって一日を過ごしているのだろうか。自分の予想を超える周囲の動きを止めずにはいられないと訴えているかのような彼の姿を追いつつ、私は何かむなしさを感じないではいられなかった。

そんなある日のことである。

昼食の後、Tは、一階と二階にある教室を転々と回り、最後に二階の造形室に入る。すると、造形室のホワイトボードいっぱいに白い模造紙が貼ってあり、テーブルの上には何色かの絵の具が水に溶いて

あり、その一つひとつのケースに筆が挿してあった。Tがその筆を一本手に取り大きく振ったので、絵の具は床に点々と垂れ、その一部が白い模造紙の上に跳ねるような点線で残された。私は、はっとしてすぐさまケースから一本の筆を取り、「Tちゃーん、私もやるわよ。ほーら！」とTと同じように大きく手を振って、でも意図的に模造紙に向けて絵の具を一筋飛ばした。筆を持ったまま室内で飛び跳ねていたTが振り返り、飛び散った絵の具の跡を見つめたかと思うと、自分からほかの筆に持ち替え、模造紙目がけて絵の具を飛ばし始めた。「すごーい！」私は感激しつつ、Tが次々に色を変えて線を描き加えていくのを手伝った。

いつも一つの場所にとどまって何かに没頭するのではなく、目くるめくような速さで移動を続ける彼が、この時は降園までの二時間あまりを造形室での描画に取り組んだのである。そのスピードもいつものような落ち着きのない身体の動きとは異なり、時間をかけてじっくりと描き加えていく彼の姿がここにあった。模造紙の上に飛び散った絵の具がじわじわと床に向かって流れていく動きと、そこに重ねられていく彼の筆を振っての点描と、また、時折加えられる彼の筆を持っての線描とが、まとまったリズムとなって白い模造紙の上に表現されていったのである。

降園時間に近くなったころ、ある保育者が造形室にいる彼に気づいて、「Tちゃん、ここにいたの？お弁当の後、姿が見えなかったから、どこにいるのかなあ……と思っていたんだ」と言った。そして、模造紙の絵を見て、「ずっとここにいて、これを描いていたの？　すごーい！」と感嘆の声を上げた。Tが一つの場所にとどまって取り組んだ作品の完成であった。

私は、Tがじっくりと時間をかけて仕上げた作品を自ら満足そうに眺めたその表情を見て喜びが込み上げ、当時教頭でいらしたI先生に「Tちゃんの作品です。ぜひ残しておいてください」とお願いした。すると、I先生はすぐにカメラを持ってきて写真に撮ってくださったのだった。

それから二年経ったある日、私が勤める大学の授業で学生の実習のオリエンテーションがあり、愛育からもT先生が来校してくださった時のことである。授業後に教員間で歓談をした際、T先生が大学の教員にも学校要覧を配ってくださった。その時に、

▲愛育養護学校・学校要覧の表紙

「ほら、この絵……」と私に向かってにこやかに示されたのだったが、私は「子どもの作品……。きれいな色ですね」と普通に返すことしかできなかった。すると、T先生はいたずらっぽく笑って「絵の向きを横にしてみて!」と一言。そのとおりにしたところ、私の視界がさっと変わり、一瞬の目まいと共に数年前の描画の記憶がよみがえった。このような視界(パースペクティヴ)の転換を、私は一瞬のうちに体験させてもらったのである。それ以来、私はこの出来事を「カンディンスキー体験[注1]」と名付け、記憶の中の一つのメルクマール[注2]として大切に温め続けている。

とどまる活動の中にある子どもの「いきいきしさ」

話を本題に戻そう。

Tは、とどまることを知らないような動きをする子どもだった。その当時の彼が、この日は造形室に

とどまって大きな作品を仕上げたのだった。私は、彼の飛ばした絵の具の点に惹きつけられて同じように一度だけ絵の具を飛ばした。彼が先に飛ばした絵の具の跡が、彼の振り返りを待っている一つの刻印であるかのように私の目に映り、そこへと彼を促すような導線としての点描を、私は描かずにはいられなかったのかもしれない。彼は振り返って模造紙上の絵の具の跡を見つめ、そこから次々に点と線を描き加えていき、私の描いた点はあっという間に彼の描いた線の中に隠されていったが、そのことは私に一つの安堵感を与えてもいた。

子どもの生命性は、必ずしも目に見えてダイナミックな動きと共にあるとは限らない。子どもが一つの場所にとどまってじっくりと表現する中に現れることも多くある。その子どもの生命性は、目に見えやすくてもそうでなくても、保育者に受け止められるのを待っているのだと私は思う。だからこそ、子どもの表現が動的であれ静的であれ、子どもの息遣いに耳を澄ませ、些細な表情の動きにも目を凝らして、そこでの子どもの生命性に応えていく者でありたいと切に願う。子どもの遊びの中にある呼吸に、大人も同じリズムを感じつつ活動を共にする時、子どもと大人は一つの世界に溶け込み、人間存在としては対等な地平に立つことが可能になるのではないかと思う。

倉橋は「いきいきしさ」の一文の中で、「いきいきしさなくして子どもの傍にあるは罪悪である」と厳しい戒めを保育者に与えているが、その一方で、「子どもの最も求めている」ものが「生命」であることを合わせ示している。倉橋の厳格な言葉を受け取りつつ、私たちは日々の実践の中で倉橋の求める「いきいきしさ」に至る道をそれぞれに探し出したいものだと思う。倉橋の教えるところは、過去のこの時代に限定されるものではなく、いまも変わらず、子

どもと共にあろうとする保育者の中に息づいている。私たちは日々の実践を通して倉橋と出会うことが、いまも許されているということだと私は思う。

子どもの動きに引き立てられ、応答的に動く時の大人の生命性こそ、子どもたちがまさに求めている保育者の生命性なのではないか。生命性という通路（channel）[注3]をくぐり抜けることによってこそ、私たちは子どもとの真の出会いを体験することができるのではないだろうか。

（お茶の水女子大学専任講師）

注

1　ワシリー・カンディンスキーは、ミュンヘン時代（1896-1914）のある日、自分のアトリエに戻った時に、内側から輝くような光を発散する、見たこともない美しさの絵に目を奪われた。しかし、よくよく見ると、それは画面の向きを横にして立て掛けた自分の作品だったという。この体験こそ、その後の彼を「抽象画」に向かわせる決定的な事件だったといわれている。認識の転換点ともなるような重大な体験を、愛育の職員の皆さんと子どもたちは、これまでも繰り返し私に与えている。このT君の描画が、その後共同画へと発展したという話、また、絵の向きを変えて学校要覧の表紙に用いるというデザインの発案へと結び付いたという話は、どちらも私を驚かせるに充分だった。

2　メルクマールとは、独語のMerkmalであり、merken「察知する」「覚える」という意味の動詞とMal「印」という意味の名詞から成り立っている。つまり物事を見分ける際の手掛かりとなる特徴、指標を意味する。私は研究の視点が開かれるような体験であることを強調するために、この語を用いている。

3　channel は、ラテン語の canalis（水道管）からきた言葉である。水を供給する導管のイメージが人と人との間をつなぐ通路のイメージに重なることを、私はロジャーズのカウンセリング理論から学んだ。
Rogers, Carl R.　On Becoming a Person
Boston : Houghton Mifflin, 1961
（『自己実現の道』岩崎学術出版社　二〇〇五年）